

魅力ある文学館にするには

私は、(富山市にある)文学館が市民の知的な憩いの場になればと常々思っています。こうしたニーズは文学館設立時に制定された運営基本方針にも盛り込まれ、「気軽に楽しみ学ぶ機会の提供」として文学のみならず文芸にも対象を広げ、文学をいつでも誰でも楽しく学ぶことができるようになると謳われております。

本来ならこれで十分すぎると思います。がしかし、文学を愛好する方々や興味ある方々以外の(割合多くの)市民には、なかなか文学館の理念が響きにくいように思います。これは、一般社会では(文学の)学びもさることながら、学びが自然発生的に湧き上がっていないことによるものではと思っております。

そこで私は、学びが地域に根差して生活の営みから自然に滲み出てくるようにすべきであり、そのためには何をなすべきかを考えました。すなわち、我们的な生活において、文学との触合い機会を増し、文学の雰囲気に浸るようにと思います。すなわち、

- ・雰囲気については、文学の雰囲気が満ちているエリアやスポットがほしい。

- ・文学との触合い機会を増すには、教育現場からの目に見えない下支えがほしい。

上記二点は文学館だけでできるものではありませんし、実現不能かもしれません、文学館の魅力はそうした日常生活からの理解が形を変えた総体となって多くの市民には一層響くことになるでしょう。

上記二点について、以下に具体的に説明します。

(1a)富山市文化文芸ゾーンの香り創出

文学館の周辺地域に野外ショッピングウインドウならぬ文学館黒板で文学的な発信があれば、文学の匂いが地域に漂うと思います。

(1b)図書館との連携

富山市図書館では(ガラス美術館や建築作品スペースと共に居して図書文化の香りが倍増しているので)一過性でもいいから文学スペースを設けて何か関わりが形になればと思います。図書館にとっても相乗効果が大いに期待できるかと。

(1c)気楽に文学と接する人の場

館内の展示やそれ以外の事でも何か聞いてみたいと思った時、何か気楽にお聞きできる方がいておしゃべりできる場があると、館内のムードが一段と和むかと思います。特別に人を配置するということではなくて。もちろん、関心ある方の友の会への入会は当然です。

(2a)学校教育との関係づくり

例えば現代国語の最近の授業では文学作品を鑑賞し感性を磨くことが少なくなり、また古典の授業では文学作品は知ってどうするといった感すらあります。これは教育関係の問題ですが、教育からの下支えがないと文学の感性が育ちにくいくらいか、文学よりも現実対応のスキル中心がめだつことになります。こうした問題をより良き方向で解決するために、学校関係者と共に文学関係者との論議があれば状況が変わっていくかと思います。

(2b)子ども期からの情操の育成について

文学の理解には、人間同士の触れ合いや自然鑑賞などの基礎的な素養の育みが必要不可欠であることはいうまでもありません。初等教育の現場や家庭において、健全な営みをむしろ文学からアプローチすることを考えたいものです。未就学児では絵本、就学児では児童本を介してどんな働きかけが必要なのか、そんな視点があれば文学館の企画もより一層幅の広いものになるかと思います。

動機

私は、遅まきで文学が好きになった方ですので、いまにしてようやく文学がもっと身近になって、できれば家庭も含めて街全体に文学の香りが漂えばと願っております。富山県では文化・歴史の香りがする県をめざすなら、これにもうひとつ加えるのです。そんな意識で図書館や文学館にたまに通っていると、何となく思いがもっと形になって、いってみれば日常生活における文芸世界の支援というか市民サイドの文芸運動になればと思います。この観点で文芸支援活動にコミットしたくなり、ここに貴委員会委員公募に応募する次第です。(文学が市民にもともと身近になるよう、お手伝いできれば幸いに存じます)